
卵の殻を破る瞬間(とき)

李夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

卵の殻を破る瞬間^{とき}

【Nコード】

N3062A

【作者名】

李夜

【あらすじ】

誕生日に大きな銀色のトランクを贈られた“僕”。その中に入っていたのは一人の少年だった！未来から来たと云う彼は、自分は暗殺者だと名乗る。彼はここで任務を遂行すると云い出した……。

おわりのはじまり

小鳥の啼き声で今朝も目が醒めた。わずかに開いた窓の隙間から、首を忙しなく傾げて中を覗き込んでいる。僕は彼を指にとまらせ、朝の挨拶を交わした。

「おはよう、アダム。奥さんは元気かい？」

チュン、と啼く。僕は彼の小さな頭を撫でてやりながら、ふわふわの羽毛に頼ずりした。

「そうか、いつでも連れて来ていいからね。伯母さんの作ったクロワッサン、気に入ってくれた？」

アダムはまたチュンと愛らしく啼いて、手の平のパン屑をつつきはじめた。少しくすぐったかったが、食事の邪魔をするわけにはいかないのだじつと耐える。

階下から、伯母の声が聞こえた。

「おはよう、母さん」

甘酸っぱい苺ジャムの香りが部屋いっぱいに広がっている。毒々しく赤黒いジャムは伯母の手作りである。味はこの前のマーマレードよりはまじだった。

伯母は僕に気付くとぱつと顔をほころばせ、その大きな体で僕を抱き寄せた。

「おはよう、アルエット。私のかわいい息子」

痛いくらいに抱きしめられる。伯母は僕を解放すると、左右の頬にキスをした。今すぐにも顔を洗いたかったが、朝食を腹に詰め込むまでは我慢しよう。

彼女を母と呼ぶことには、五年という年月が慣れさせてしまった。ただ、母親として振舞われるのは気に入らない。しかし、彼女は僕を息子と思い込むことで救われる。僕はいつまで彼を演じていれば

いいのだろう。

朝食を終え、部屋に戻った。朝日が窓から射し込んで、僕の足を照らす。伯母に塗られた透明のマニキュアが、てらてらと反射していた。

僕は本棚に近寄って、読みかけの本を手にとった。数えきれないほどの蔵書は、すべて伯母の息子のものである。本棚に入りきらず床まであふれたこの本たちを、彼はどれほど読んだのだろう。読んで、何を考えたのだろう。

窓辺に腰掛けて、まさに表紙を開くところだった。外で聞き慣れた声がする。僕は本を閉じて卓上に置き、窓から身を乗り出して声のする方を覗き込んだ。

「ミラン、どうしたの？」

伯母と話していた彼は、僕に気付くとニヤリと怪しげな笑みを浮かべ、降りて来いと手招きした。僕は螺旋階段^{らせん}を降り、玄関へと向かった。

扉の外には大きな荷物を抱えたミランが、伯母と愉快に会話をはずませていた。茶色の髪が、陽射しに透^すけて赤く輝いている。長身の彼は伯母越しに僕の姿を確認すると、陽気に声を掛けてきた。

「やあ、アルエット。久しぶりだね」

「やあ、ミラン。昨日も会ったけどね。それより、今日はどうしたのさ？」

僕が訊ねると、ミランは腕の中の大きな箱を軽く持ち上げた。

「君にプレゼントだとき。いったい、どこの女を掴まえてきたんだ？」

伯母の頬がピクリと引きつるのがわかる。彼は故意に僕を困らせる嫌いがあった。

「からかうのはよしてよ」

そう云って、僕宛だという荷物を受け取ろうとした。だが、彼はそれを遮って家の中に入ってくる。

「おまえには無理だよ。いったい、何が入ってるんだ？こつそりいかがわしいもんでも注文したのか？」

僕は彼の脛すねを蹴すって、扉を開けるため一足先に自室に向かった。後ろから彼の呻うめき声が追いかけてくる。

僕が部屋で待っていると、荒い息とともにミランが入ってきた。額には玉粒の汗が浮かんでいる。彼は乱暴に箱を放ると、僕のベッドへ勢いよくダイブした。

「こりゃ、明日は全身筋肉痛だ。精々（せいぜい）、労われよ」

僕はその言葉を見殺して、箱に掛けられたリボンを解ほどく。箱を開けると、小さなカードが入っていた。綴られたメッセージを見て体が硬直した。

『誕生日おめでとう』

そう、今日は僕の誕生日だ。しかし、今はアルエットである僕を祝ってくれる人なんて誰もいない。だから、今日、僕にプレゼントを贈る人なんていないはずだった。

「何固まってるんだ？」

ミランが僕の髪をリボンで結いながら問いかけてくる。僕はカードを慌ててズボンのポケットに押し込んだ。

「結局、何が入ってたんだ？」

そう云って、箱の中を覗き込む。僕はそれを眺めていた。

大きなトランクだった。銀色のメタリックな光沢が眩しい。僕たちはそれを箱の中から取り出そうと持ち上げた。

「あれ、これさつきより重くない？」

ミランが不思議そうに首を傾げながら呟いた。

「知らないよ。君がひとりで運んだんだろう。ばててるからそんな

ふつに思っんじゃないの？」

ミランはまだ腑に落ちない顔をしていたが、僕の視線に気付くと勢いよくすつくと立ち上がった。

「ま、俺の仕事はここで終わりだ。じゃあな」

ミランが部屋を出てゆく。僕はしばらく部屋の真ん中で立ち尽くしていた。

かなしいめ

ミランが帰ったあと、僕はトランクをクローゼットの中にしまうことにした。贈り主がわからないだけに、気味が悪かったのだ。

取っ手を両手で持ち、力を込めた。

重い。重すぎる。ミランはよくもこんなに重いものを二階まで運んだものだ。僕の力じゃ到底クローゼットまで運べない。たとえ引きずったとしても、床を傷つけるわけにはいかないし、第一、音を聞いた伯母が何事かと血相を変えて駆けつけるだろう。

こんなに重いと、ただのトランクのはずはない。中にきつと何か入っている。

僕がトランクの前で座り込んで思案していると、微かな音が聞こえてきた。

カタカタカタ。

何だろう。

ネズミかもしれないと思い、僕は天井を見上げた。

ガタガタッ。

さっきよりも大きな音に僕は身をすくめた。唾はきをこくりと呑み込む。

間違いない。音はこのトランクから聞こえた。

僕はノックするように、トランクのふたを拳こぶしで軽く叩いてみた。すると、トランクから激しい音がしてガタガタと揺れた。

何だ？何がこの中にいる？

僕は勇気を出してトランクを開けることにした。手が震える。トランクはますます轟音をとまなつて暴れている。

「ちょっと待って、今すぐ開けてあげるから」

僕がなだめるようにトランクに向かって話しかけると、さっきまでの振動が急に止んだ。中にいるのはやはり生き物だろうか。僕の中で、恐怖心と好奇心が入り混じっているのがわかる。

かちり。

鍵が開いた。僕はそつとトランクを開ける。

闇の中で二つの光が煌いた。目だ。やはりこのまま閉めてしまおうか。一瞬そんな考えが胸をよぎったが、僕は振り切って一気にふたを開けた。

「わぁっ！」

僕は驚いてトランクから飛びのいた。中にいたのは犬でも猫でもましてや宇宙人でもない。人間だった。僕と同じ年くらいの。

男か女かはわからない。綺麗な髪をしている。世間はこれを銀髪と云うのだろうか。少し長めで、光に当たるとキラキラと輝いた。

「おい、おまえ誰？」

いきなり話しかけられて、僕は身をすくめた。僕の方を睨みつけるその目は、透きとおる銀灰色をしている。

「ねえ、聞いている？」

少年が、語気を強めて僕の頬を両手ではさんだ。そう、この子は男だ。綺麗な顔をしているが、声やら体格でわかる。僕は心の片隅で密かに落胆していたのかもしれない。返答が少し遅れた。

「はひ、きいてまふ」

「で、おまえ誰？」

僕は答えようとしたが、彼の手がまだ僕の頬をはさんだままだったので話せそうもなかった。僕が身振りで訴えると、彼はすぐにパツと離れた。

「僕はアルエット。君は？」

「俺は……、暗殺者だ。云うとおりにはないとおまえも殺す」

急に凄みを利かせて、少年は僕に近付いた。

暗殺者？僕とそう年端の変わらないこの少年が？僕は思わず笑い出していた。冗談だと思った。だけど、実際は笑えない冗談だった。

ガタン、と音がしたかと思うと、僕は床に叩きつけられていた。ぶつけた頭が痺れ、抑えつけられた肩がきりきりと痛む。

「どうすれば信じてもらえる？おまえを傷つければ少しは信じるか？」

喉元にヒヤリと冷感が走った。ナイフの金属質が僕の体温を奪ってゆく。喉が渴いて声が出せない。少年は唇を歪めて、固まる僕を嗤^{わら}っている。

「俺たちをこんなにしたのはみんなおまえたちの所為だからな」

少年がナイフを振り下ろす。僕は目をつぶることしかできなかった。

ふりそそぐじかん

かすかな風圧が僕の前髪を揺らしたかと思うと、それはぴたりと止んだ。うつすらと目を開けてみれば、目の前にはナイフの尖端がこちらを向いていて、僕は再び反射的に目を閉じてしまった。

僕が身を縮めていると、真上の少年は喉から飛び出さないように笑いを押し殺しながらそこを震わせた。笑われていい気分はしなかったが、だんだんと大きくなる彼の笑い声はとても透きおっていて耳に心地よかった。

「冗談だよ。殺しやしないさ。俺はまだ標的さえ知らされてないんだ」

ようやく体の自由を与えてくれた彼は、僕に手を差し延べ身を起こしてくれた。骨ばった手は、僕のそれよりも熱い。僕は昔から指先が氷のようにいつも冷たく、ミランには女の手のようだとよくからかわれたものだが、その所為か彼の手の温もりがひどく心地よく感じた。

いつの間にか、ぎらつくナイフの光は消えていた。

僕はいまだ握り締めた彼の手を、彼の訝しげな視線とともに離れた。

「でも、暗殺者って云うのは冗談じゃない？」

「そうだよ、怖がりなお嬢さん」

彼は気障っぽくそんな台詞を口ずさみながら、僕の髪にあの温かな手で触れた。しゅるりと音がして、深紅のリボンが床に落ちる。箱を飾っていたそのリボンは端に金の縁取りがしてあって、少女が髪を結わえていてもおかしくないほど上質で愛らしかった。

「僕は尖ったものが苦手なんだ」

ナイフの切っ先くらいなら大半の人間は怖がるだろうが、僕の場合それは重症で、鉛筆を削るときもわざと尖らせないくらいである。もちろんナイフも苦手なので、余程のことがない限り自分ではやら

ずミランに頼むのが常だった。しかし、さすがにそこまでは、目の前にいる会って間もない少年に云う気にはなれなかった。

「何かトラウマでもあるのか？ 嫌な思いをさせて悪かったな」

「別に。君が危険な奴じゃないって目を見てわかったから」

彼はきよろきよろと目線をさまよわせていたが、やがてそれはベツドの横に置かれた僕の置時計に止まった。アルエットが入学祝にもらったというその時計は、正方形の透明なガラスの箱で、その中に卵の形をしたものが高速回転して時間を告げる一風変わった時計だった。回転する方向に日付と曜日と時間が流れ、月が替わることにその色も変わるといふ楽しみもあった。

そんな珍しい時計だから、彼が目を眇めてそれを凝視するのも、初めて見る奇妙なオブジェに関心を寄せているだけなのだと思った。しかし、彼の顔に浮んだのは目を見開いた驚きの表情ではなく、何か得心したような意味深な笑みだった。

「どうやら誤差はなかったようだ。おい、アル。俺がどこから来たか知りたいか？」

いきなり呼ばれて、とっさに応えることができなかった。それも彼が僕を“アル”と省略して呼んだからだ。そんなふうと呼ぶのは僕の周りには誰一人としていない。皆が皆、僕に念を押すように“アルエット”と初めから終わりまで正確に呼ぶ。それを今まで受け入れてきた僕だから、“アル”と呼ばれても自分じゃないような気がしてどこかくすぐったかった。

「俺は今現在から三十年後のモマンからやって来た。だから、もしかしたらおっさんのおまえに会ってるかもしれないな」

快活に話す少年は、まるで天気の話でもするように平然としていく。僕はさっぱりついていけず、凝然と彼の顔を見つめることしかできない。

「信じられないって顔してる。それも無理ないかな。こっちのジジイやババアだって、いまだに信じやしない。まあ、認可されてから今はどこでも運転中止だ。やっぱ、トラブルが絶えないらしい」

相槌も打てない僕を呆れたように眺めながら、彼はなおも続ける。「でも、裏では違法で……そう、あれみたいにとの時代でも飛ばしてくれる」

彼の指した方向を見やると、大きなトランクがぽっかりと口を開けて底をのぞかせていた。目を凝らしても、どこかへつながらる穴もドアもない。

ますます信じられないが、彼があの特ランクから出てきたのは事実であるし、思わず見蕩れる銀灰色の瞳も嘘を云っているようには見えない。

「そして標的がガキの頃に仕留めるってわけだ。もう一人もそろそろ着いてるだろう。そいつと合流しなくちゃ、俺は仕事を始められないんだよ」

僕は、そう云った彼の瞳に猛禽類の鋭さが宿るのを見た。そして、ああ彼は棲む場所も時も違うのだ、とそんな思いが春風がそよぐように軽やかに僕の心に流れ込んできたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3062a/>

卵の殻を破る瞬間(とき)

2010年11月19日18時07分発行